白 鷗 漁 史 回 想 録

Memoirs of Hakuo Goshi

日本医学図書館協会名誉顧問

中 里 龍 瑛*

1. 疎開から病院に

10年1日のごとしといわれるが、20年の間大学図書館のカード取り、つまり図書の整理ばかりしていたので、事務に関することはからっきしだめであり、一番嫌いであつたにもかかわらず、協会の事務をやり始めたのは、堀川にはまりこんだものが、のびきならず、運命の流れに、棹さしたようなものと思っている。

病院の図書室から疎開の相談をうけて、山形の大久保村にたくさんの本を運んで間もなく終戦になった。

「君は宇井（伯寿教授）君とどういう間柄か」と、親しく声をかけられていた市河三喜館長から、「もう病院に行かんでもよいだろうが」といわれたが、その一瞬とまどい「まだ永く疎開するそうです」と答えると、無然として「それじゃ止むを得ん」と、けわしい心づかいの顔でにらまれたような気がした。わたしは体が弱かったのである。その後、市河先生が英文で長い祝辞をされた丸善の新築祝いでも、国際文化会館の開館のときにもお会いしたが、ただ黙々として話すことなくすぎた。

新築した東大病院図書室には、図書館から来た人たちがばかりで、昭和9年初代の図書主任に木村重三郎（第10回熊本総会で、初対面の時の豪傑ぶりの話を吉岡さんから聞いた。——吉田富三教授と一高の同期生）、山崎武雄（作家、渋川堯文部大臣賞受賞）、会田由（東京外語大教授となり、ドンキホーテ完訳）、三輪福松（慶応大学教授）の面々であつた。

2. 再開のさきがけ

昭和21年の春、東北の吉岡孝治郎さんが、まだ都内入りに制限があり、食糧事情で宿泊も困難なころ、リュックサックを背負った姿で東大病院を訪れ、「またやりま

しょう」と、声をかけられて発奮を促された。

5月初め頃かと思うが、赤い輪郭のある病院の半野2枚に、三輪福松と中里の名で戦前の加盟館に「医科大学附属図書館協議会」の再開を呼びかけたのが戦後における協会再開の発端で、この6月、京府の実務者会合となつた。

しかも、この年太田正雄先生が亡くなられ、6月北村包彦教授が後任として図書室を主管し、同時に協会の方向づけをなされたのであつた。

戦後初の総会は、第16回となっている。京都府立医大における総会の出席者は、20人足らずのものであつたがみんな初対面ながら、仲間のような親しみを覚えた。

宿に風呂がなかったので、中山さんと近くの銭湯に同行して懇意になった。破れた靴のかわりに、郷里で貰つた新しい総桐の下駄ばきで、京都まで往来した。

休憩の時、小さい京菓子を一つ頂いて貴重な思いをした。当番館の赤星さんが、お米持参（切符…当時米の購入は切符制だった…）だったせいか、食事を共にしないで、懇談を接待と心得てかも知れないが、夜遅くまで談笑ばかりするので、「何か見張りされているようだね」と、いう口の悪いのがいた。

3. 年表の誤り

それから間もなく、そのころの看護婦養成所として厚生女学部講師の辞令を頂いて、4、5年間講義と教務をかねたりしたので、金沢と東北、それに阪大の総会にも出なかったが、その後協会の年表を2、3度作成した。今初めて気がついたことは、従来の年表によれば、昭和23年の臨時総会の時に京大の加盟としてあるが、これは昭和23年第19回阪大総会の時に、京大、東京医歯大、松本医大（現、信州大）の3大学図書館が同時に加入可決していることを議事録で知った。京大では、医学図書館がなかったので、内科図書室からとして荻生教授が出席さ

* Ryuei NAKAZATO : Honorary Adviser to JMLA

れ、加盟の挨拶をしておられる。

松本は、翌年に議題も出しておられるので、従来年の表は明らかに誤りである。ここにお詫びして訂正したい。

4. 図書交換と複写サービス

1948年(昭和23年8月17日)、アメリカの国立軍医図書館(A.M.L.)からグロスベック(Mr. John Gresbeck)が来訪するのを機会に、臨時総会を東大で開催した。

加盟13館と東大からは、緒方先生が通訳をしてくださった。他に三輪、中里ら16人に、医学部の会議室で今やドイツ医学は過去のものになったので、アメリカ医学がこれに代ってきたという意味の講演があった後、日本の医書文献の交換をはかりたいといわれ、日本にない文献の無料複写サービスを約束された。その時のメモを騰写版刷にした記憶もある。

それから後、昭和25年頃、日本から和文のバックナンバー34種、約5,000冊をアメリカに送っただけであったが、AMLからは欧文誌23箱を頂いた。

また、昭和24年、名大総会の頃AMLから医学図書を38箱頂いた。これにはリストがあり408冊であった。交換図書は委員会をつくって、1冊対1冊で各大学から重複本を出して貰ったが、適当なものがないと困った様子であったが、どこまでも交換のたてまえで配分したのである。

5. 米軍の図書館人

東京陸軍病院図書室の主任、ミス・ダンバーは、ドイツ系の祖をもつとかで、兄さんが外科医であるとかいていた。この図書室には、共立薬科出の木下さん他日本人館員も2、3人いた。はじめ、聖路加病院にあったが後に現在の国立癌センターのところに移った。406部隊の新谷城氏(ハワイの二世で医博、文献を探索したり借出しでよく来られた)に欠号雑誌を補充したいがと話すと、TAHのミス・ダンバーをお連れして紹介してくれた。ミス・ダンバーは、よく協会のために精力的に情熱をこめて図書の交換にあたり、先方から届けてくれたりたくさん雑誌を頂いた。しばしば来訪され貸出しもしたが、駐留軍の読み古した新刊のバックナンバー等あり東女医大の吉岡館長と榎原先生も同行されたことがあり大変な数のものを頂いた。

朝鮮戦争のころに、戦地むきの臨床の医学図書をおびただしく廻して貰ったので、加盟大学との図書交換はできたが、交換本は古くとも、薄くともよく、1冊対1冊

だったので、重複本はもうないといふやうな位であった。

彼女は、いかにもピチピチしてアメリカのビジネスウーマンらしかった。自分は椅子から立ち上って相手をすわらせ、自分のところでは、こんな風にやっていると尋ねるまでもなく、図書館の様子をこまかく話してくれた。

禁じた場所で喫煙したとかいって、すぐくびにしたり厳しい一面もあったが、極めて親切で外人食堂で馳走して貰った時には、自分の知っている限りの、にんじん、あめ、等と日本語を残らず口に出して笑わせるといったヒョウキンなどころもあった。

当時めづらしいヘリコプターで朝鮮に行ったとか、三井の箱根の別荘とか、小涌園に行ったとかいっていた。

昭和28年の春頃、軍艦で横浜から日本を去った。その後彼女からの便りには、こんなことが記されてあった。

日本を去る日、これが日本との一生の別れと思い涙をポロポロ流し、それを拭くおうとしなかったこと。軍艦が陸から遠ざかるにしたがい、みなさんをiの字ほど小さくなるまで見つめていたこと。後でアメリカ映画「サヨナラ」を見たこと。もう16年になるとか。等である。

毎年クリスマスカードを頂いていたが、ヨーロッパに旅するとかいってから消息が絶えた。

ミス・ダンバーの後に男子館員になったが、後にミス・ディビスが代った。フロリダ州出身らしく、ミス・ダンバーほど積極的ではなかったが親切で、雑誌も頂いた。

薬学図書館人を含めて50人ほど招待して、手料理らしい懇親会をにぎやかに催して頂いた。昭和31年7月9日の英文サンデー毎日に「TAH Has "Workshop Tea" For Japanese Medical Librarians」の見出しで Miss Lara Frances Davis が、医学薬学の図書館人を招いて図書館の見学とティパーティを催されたと報じ、講習会開催のことも紹介された記事を送ってくれた。群大の協会創立30年記念に日本の46大学蔵書印のアルバムを6名のアメリカ人(オレゴンのミス・ハラム、ミス・ダンバー、ミス・ディビス、ドクター・マッコイ、米国国立医学図書館長の Colonel F.B. Rogers、元慶応大学教授ミスター・ギトラ)に送って喜ばれた。ミス・ディビスからは1958年8月のある日、「遅くまで仕事をして家に帰ると、はからずも協会から送られた46大学の蔵書印手帳を手にした私の、この喜びをご想像頂けるでしょうか」という無限の感激を寄せられた。

6. オレゴン大学との親交

1946年(昭和21年), 米国ポートランド医師協会から, 文献交換を提議され, 翌年の名大総会頃初めて雑誌寄贈があり, それから何回かにわたって雑誌寄贈があった。昭和28年正月頃には, 3回目になっていた。

その後, 昭和32年, ポートランド医師会長 Dr. Fitzgibbon から欠号補充のため希望リストを送ったところ, 今度はオレゴン大学の医学図書館長ミス・ハラムが, 昭和33年8月に雑誌3,400冊寄贈され, その22日に着荷した。

オレゴン—サンフランシスコの運賃は先方も, 船から東大まではこちらもちで, 委員会をつくって配分した。それから昭和34年6月29日, 横浜から米軍がトラック2台木箱8個他に20個, 中には麻のクロスや背皮で製本されたものがあり, その地の研究所とか, 小児科の M. Dowell Margsrct, 産婦人科の Dowsett 博士等と署名のあるものもあり, みんな血の通った親近感あふれる思いで受けとった。数はすべてで16,786冊であった。

昭和31年に札幌まで164冊の雑誌を送るのに, 1,140円の運賃, それに荷造料が800円かかるので, アメリカよりも日本の方がはるかに高いものと思いこんでいた。しかるにこれはそうではない。ポートランドの医師会長 Dr. Fitzgibbon は同地医師会の方に, 特に夫人方に呼びかけて, あらゆる医学雑誌(いわば読み古しの雑誌でもあろうが, 戦争のため輸入できず, 日本で一番欲しがっていたもの)を無料で提供して頂いて, これをオレゴン大学の Miss B.B. Hallam が陸軍に届けるまでの手筈をつくしてくれた。しかし, その荷造運賃にハタと困ってしまったが, これを Robert H. Shiomi M. D. が聞いて, 心よく費用の全部を提供され, 米国内の荷造りと運賃はドクター・シオミが陰の人になり, 米軍の力で日本に届けられたのであった。

昭和32年7月8日, 北村包彦教授が5年ごとにあるストックホルムの第11回国際会議(800名ほど)で講演されたその帰途, オレゴン大学に感謝のため訪問されたが, 運賃の軽減を考えているとのことであった。

その後も Miss Hallam と, その医師会から欠号補充のためのリストが, 次々と緒方会長のもとに届けられた。

雑誌は, その後も送って頂いたが, ドクター・シオミは1958年(昭和33年)9月に亡くなられたということであった。

7. ユニオンカタログ

「医科大学総合医書目録」 Union Catalogue of Foreign Books in the Libraries of Japanese Medical Schools は, 昭和17年発行の「医科大学共同学術雑誌目録」の姉妹編とでもいうべきもので, 加盟館以外の大学医学図書館に所蔵された医学書全部の原稿カードを提出して頂き, 整理, 編集の上大学名を入れたもので, 昭和24年9月に第1冊を刊行し, 昭和31年10月刊行を完了したのである。

その間3年計画で文部省から科学研究助成金の交付を得, 京城大にいた上村さんらに, 訂正編集を, 東北の吉岡さんが吟味, 新潟の中山勇之助さんに全責任を負わせた形で, 更に慶応, 東大, 新潟に校正刷りを廻し, 4, 5校も要したところもある等, とにかく3校以上の校正を経て刊行したのであった。

①A—B 昭和24-9-9	⑦S 昭和27-6-20
⑤M—O " 25-3-10	⑧T—Z " 28-5-25
②Br—Fo " " 9-25	③Fo—H " 29-10-10
⑥P—R " 26- "	④Ho—L " 31-3-30

昭和31年3月30日, 8巻8冊, 刊行完了。

東大の分にもれがあったり, 全体にわたって発行地のないという難点の恨みもあったが, 共同総合目録として他に類例がない等とほめられたこともある。元来この文献サービス事業は, 昭和12年 Information Bureau として発足し, 昭和22年東北の総会の時, また名大に再開されたもので, カードケースも新調し, 各館が新たに図書を収蔵するごとに, 増加したカードを名大に送ってもらい, これを順次繰りこんで整理しながら, 図書所在の問い合わせに回答するという情報活動を行ったが, その後名大の大島武四郎さんから, 東大の中央事務局に移されて, 名大同様の作業を継続しながら図書所在の問い合わせに応じたものであった。

昭和28年信州総会ですでに総合目録の追録も協議されたが, さらに昭和32年以後にも, ユニオンカタログ増加篇の編集刊行が決議され, 昭和34年6月加盟館以外の癌研, 抗酸研, 公衆衛, 伝研, 予研, 微研, 医師会, 等主要図書館30館に1959年10月までとして所蔵本のカード提出を依頼し, これを繰りこみ編集を整備するかたわら, 情報活動は重ねていたものである。

8. 戦時バックナンバー補充の請願

輸入の途絶で、海外諸国の医学雑誌が、ブランクになった、この戦時10年間分を国費によって補充されたいということは、相当以前から問題になっていたが、昭和26年の日本医学会の学術展示会にも、その概略を計画して会員に訴えた。その年熊本の総会に、バックナンバーの補充方を文部大臣に懇願する議題が提案された。

バックナンバーの入手については、海外諸国でも発行国でも入手に懸命になっており、価格も日々高くなり、絶無に瀕している状況だったので、入手対策の具体化は急を要する問題であった。

大学自体の経費では困難だったが、とにかく遅れをとると一層困難な重要問題なので、東大、慶応、東京医科歯科、千葉の4館が実現に努力することが決議されたため、幾度か文部省に足を運んだが、考慮しているというだけで遅々として進行しなかった。

医学図書館協議会の決議による請願ばかりではなく、他に何か良策はないものかと切迫した情勢であったが、このような経過を初めから察知していた東大の北村包彦教授は、全加盟館長の代表になり、連名で文部大臣に請願する決意をされた。

外国医学雑誌 1941年～'50年の10年間、600種から1セット200種を選んで、全国8つのセンター館に1セット宛分置するよう、各加盟館長の調印を得た上で、医師会(当時、医師会図書館も北村教授が管理していた)や紹介議員の斡旋で衆参両院議長に提出し、昭和27年、北村教授、慶応の佐野さん、私と3人で文部省に請願したのである。

学術課長は、国民の権利だから請願も結構だが、予算は組んでであるといわれた。しかし、本年度の国会に間に合うかどうかはわからないらしかった。参院議員の木村文教委員を訪ねて訴えようということになり、よそに出かけないうちに、朝6時頃北村教授と一緒に訪ねたこともあった。衆院議員の竹尾式文教委員(幸太夫のロシア見聞を記した世界的文獻「北槎聞略」10巻を、古いロシア語を検討しながら、現代語訳にした人、外語大ロシア語科卒、後に次官になった)を衆院宿舎に、これも早朝訪ねたが、あまり早いので入口でモジモジしていると、「そこにいるのは誰だ」と大声でスイカされ、「秘書かと思った」と招き入れてくれた。更に印旛沼湖畔の郷里まで訪ねて、奥様から昼食をご馳走になったこともあった。

一方、武見太郎氏(吉田茂の親戚で主治医と聞いた。現日本医師会会長)の診療所になっていた教文館6階あたりを訪ねると、エレベーターに2人で乗り合わせたのがご本人であつたりした。「ソウリもよいといっていたよ」というので「ソウリでどなたですか」と問うと「総理大臣だよ」といわれた。

緒方、北村教授から、文部省岡野学術課長、武見太郎氏等5、6人で懇談しようといわれ、本郷の学士会館分館でその会を開いたりした。

文部省にも何回か設ねて状況を知ろうとしたが、模糊として不明であった。直訴ではないが、今度は衆議院の文教部委員長石井島氏(元東大事務局長)を慶応の佐野さんと訪ねて、こころやすく懇談している席で、文部省学術課長に電話し「あれを、あの通りやろうよ」「あれをみんなやるんですか」「ああ、みんなだよ」といったような、委員長に押され気味の言葉を交していたが「課長によくいっておくよ」とうれい返事を得たのであった。一生のうちで、そう何遍もない喜びであった。

かくして、これは、その後名市の総会で「8年間にわたって実施され、明年も継続されます」と文部省からと発言できる根拠となったのである。その範囲は、医学の学術誌だけではなく、自然科学、人文科学の各部門にわたる戦時中入手困難だった学術雑誌全部に及ぶものであった。

9. 外国医学雑誌総合目録

戦争のために輸入が途絶えて入手できなかった1941～1952年間の(これは52年までとした)学術医学雑誌を国費によって購入して頂きたいと国会に請願までして、ようやく補充されつつあった当時、AML、オレゴン大学等の厚意で頂いたもの等を含めた全国医学図書館の雑誌所蔵目録の刊行がなされないため(昭和26年4月に「最近10年間の海外医学文献総合目録」一第13回日本医学会総会参加のため当協議会で作成したクリスタル特集号はあったが)欧米の優れた業績やら引用文を見ても原文が見られなかった。その上、その原著を掲載している雑誌が果して日本にあるのか、あってもどこの図書館が所蔵しているのか、多くの時間と労力をかけても皆目わからない、等医学の研究者のために残念なことであった。『外国医学雑誌総合目録』の必要性は、こうした現実から刊行が具体化されたのである。

一日でも早くその所在を明らかにし、相互貸借、複写利用等に役立てるために、全国の補充雑誌の所蔵状況を

知るために、46大学以外の主要な医学図書館の協力と、東大の男沢淳さん等の援助によって、精根を尽して編集されたのである。こうして『外国医学雑誌総合目録』は必要部数の希望を募って、昭和29年2月20日、ユニオンカタログと同じ印刷所で印刷した。

慶応の図書館学科主任教授ロバート・エル・ギトラさんは、この目録を評して「収録雑誌は1,734種、協力館は77で、目録は小さいが、(B5判, 124頁)これまでになく充実しており、日本の医学研究者ばかりでなく、世界各国にとって役立つものである。主語の見出しがゴシック体で、2段組み、誌番号、出版地もあり、所蔵館はローマ字の略語、巻数が太字、統一的書誌作業の優れた点が称賛に価する。相互貸借に貢献する医学分野に欠くことのできないばかりでなく、国外においても医学逐次刊行物のすぐれたチェックリストとして役立つであろう」と、いっておられた。

10. 医学図書館発行

東大にまだ医学図書館の館長制がなく、木下空太郎先生の病没後、北村先生が病院図書室のお世話をなされ、東北の総会以来6年もの間総会に出席されたが、バックナンバー補充問題が解決されたころ、京大の総会を最後に2年制を決められて、緒方富雄先生がその後を引き継がれ、協議会の方もお世話するようになった。

協会の事業が複雑になるにつれ会費もいるが、日比谷のCIEのコンテンツ情報とか、謄写刷の『医学文献情報』の体裁では各大学において会費が出しにくいということから、緒方先生のきもいりで、活版の雑誌にしようと丸善の八反田さんと相談し、A5版の16頁、隔月年6回の小雑誌とし、丸善の幹旋による広告負担の発行ということになった。誌名について、初め月刊医学文献情報または、メディカルライブラリー、にしようとしたが、すなおに『医学図書館』でいくことにした。

表紙のデザインは、学会誌を編集していた青島友美さんに頼んだ。同業者の幹旋ではあまり広告もとれないらしく、後に丸善の広告だけの負担になったようである。原稿が集らず何しろ一切合財ひとりでやっていたので、遅筆に馬力をかけたが、ご多忙の先生方に書評を依頼したり、期日に間に合わないこともあった。その間戦後加盟12館から大学図書館全館の加盟となり、弘前、久留米順天、九大、阪医、日大、札幌、横浜、東医、関西、岩手、北大、東大、等の医学図書館が次々と新築して整備された。

一時は非難の言葉をあび、邪魔扱いされた加盟資格の基準が、大学昇格よりもうるさいともいわれながら、館員が1名から3名、5名から16名となったところもある。

図書室が図書館と改められ、中央図書館設置の機運をもたらしたのは、規約が生きたといわれ、医書目録も逐刊書目も、個々別々の書目から共同書目、総合書目、そして全国所在目録ともなった。

文献サービス事業は生きた図書館学という声が聞かれたり、他方では、展覧ニュースや、特にありがたいのは、医学文献情報だが、部数が少ないため一部の教授だけの配布なのが残念だとか、米国の複写文献のこと等、これまでに掲載していたらどれだけよい参考になったかわからない。「編末記は、トップ記事で楽しみ」という便りもあったので気をよくしたこともある。

11. ロンドンの第1回国際医学図書館会議

1953年(昭和28年)7月20日から6日間330国、300名参加だったが、当初日本代表の派遣は全く見込みはなかったが、ロックフェラー財団の厚意で吉岡孝治郎さんが派遣となった。

京大総会で同じ東北の和田正男館長を代表に決めて文部省に足を運んだが、無駄だった。しかし文部省は、他の者を特に回わしてくれたような形で両人が漸く決ったが、和田先生は、その頃間に合うかどうかかわらず不安この上なかった。外務省の田村女史から親切な力添えを得て、2名派遣が実現された。

ロンドンの事務局から、これに因んで国際医学雑誌展示会に、日本の医学雑誌を送ってもらいたいとの申入れがあり、発行所から200種ほど集めたが遅れ気味なので国立国会図書館から空輸して頂いた。その後Mr.モルトンから、展示した日本の雑誌を英国の医学協会図書館で参考のため保存して利用したいと申入れがあったので了承した。9月18日、W. J. ビショップさんから親友のMr.モルトンが日本の医学雑誌の寄贈を感謝しているという書簡を頂き喜びはひとしおであった。

このMr.モルトンと同一とは知らず、谷山、関口両氏が「医学図書館の使い方」を『医学図書館』に掲載したいが、多額の著作権があるというので、ミス・ブリトンに交渉してもらって無償で訳載したが、雑誌展示会のMr.モルトンさんと同一人であることを知り、第1回国際会議における記念撮影の写真を吉岡さんから借りて、これを拡大して医学図書館に載せたのであった。

12. 複写利用の改善

昭和23年8月、AMLのグロスベックが日米図書交換と文献の複写利用を約されてから、米国軍医図書館では日本にない文献の複写無料サービスを実施して頂いた。

昭和26年熊本総会で、バックナンバーの現物購入の困難さと、文献の保護策から、フィルムまたは写真の設備があるか、これにかわるその他の措置(業者が行う便法とか)でできることが必要条件とされた。

昭和28年6月、丸善の9階に英国文化振興会 British Council が発足した頃、Miss Britton は、英国内の複写を依頼すると、心よくお世話をして頂けたが、地方には、このような事情を詳しく知られていなかった。

昭和29年頃の新加盟館には、『医学図書館』で国内にない文献は、本協会を通せば(会長の署名が必要)AMLの複写利用の便宜をはかれることが知らされたものである。その条件は、原則として国内にない医学文献であること、誌名、巻号、刊年、頁、論題、著述者を詳記すること、写真フィルムは無料だが、国内の送料は各自負担のこと、使用済みのフィルムは協議会で保存すること等であった。

申込みは、東北大医学分館であることを知らされていたが、その後、緒方先生が代表者となったところから中央事務局と二カ所の申込み窓口が設けられた。

永い間利用しているうちに、各方面からの依頼が集中して混み合うようになった。NLMに対する申込みは、(Army Medical Library から Armed Forces Medical Library となり、さらに1956—昭31—10—1日、アメリカ国防省の所管から保健、教育、福祉省の所管に移されて National Library of Medicine-NLM と改名され組織を新たにされてからも、本協会に対する文献サービスには変りなかった)航空便で発送するが、文献は船便で到着するので2カ月もかかるようになった。

郵送料の分は日本の利用者負担にして、少しでも早く入手できるようにしたい趣旨から、これを改善するために、昭和34年の九大総会に“アメリカに依頼する文献複写利用の改善について”という議題を出し、同時にNLMに複写料、その他について問い合わせると、航空便の必要を認めてくれた。NLMの相互貸借用紙をつかって責任者の署名があれば、複写と共に航空便も無料で送る等というNLMの Estell Brodman さん等からの回答が、総会前に得られたので、これについて協議した結果国際会議の趣旨を重んじ、①代表者署名で申込む、②往

復とも航空便で迅速をはかる、③複写は利用館宛直送する、④日本に所蔵する文献は、国内で処理する、⑤複写と送料は、原則として利用者が負担、⑥申込み窓口を中央事務局にする、等を申合せたのであった。

当時の思い出として、事務的でもあろうが、これ等の情報を寄せて頂いた Assistant Librarian Bさんにお礼の気持ちで浮世絵の切手を書簡に同封したところ、“贈呈”と書かなかったためか、そのまま返送されて、赤恥を感じたおぼえがある。

13. 雑誌一覧、統計表、会則の更改

戦争前後における医学雑誌の休刊、廃刊、併合、改題、再刊等、変動の多かった時代の変遷状態を明らかにするため、昭和24年名大総会の「日本医学関係雑誌の戦前戦後における創刊、廃刊及休刊調査の件」昭和26年熊本総会の「日本医学雑誌総覧作成について」が決議された。

戦前刊行の初、再版とは関係なく(現物もなし)東大病院図書室で、新たに、山城君が編集したものをもとにして作成し、2部ずつ加盟館に送り1部を訂正増補した上、返送されたものを編集した。大方の希望により、第3版とはせず、戦前と同書名の『日本医学雑誌一覧原稿』として昭和27年の夏に刊行したものであった。

これを近藤慈恩君が国会所蔵本などによって増補したのが、『日本医歯薬雑誌総覧』で当時最も大きく完成したものである。

統計表—医学図書館統計は、名大総会あたりから始まったのかどうかよく調べていないが、慶応と京大が都合上出来なかったので免除になったようであった。その以前、熊本総会で小川さんがとても熱心に連絡してくれた。

たまたま、その頃文部省ばかりでなく、問い合わせごとが多かったので、各種の回答をまとめておくことは、色々な事項を調査して備えておくことになり、實際上利用面が多いとして刊行された。昭和29年3月信州総会あたりから年次統計として刊行するようになったと思う。

第25回医歯大総会では、議事録に30頁の『医学図書館統計』が合綴された。

その後3年1回位に詳しくして出せば、年次の分は略してもよいではないかの声があったため、昭和32年5月23日の医学図書館に、『大学医学図書館統計要覧』の1枚刷を附録にしたことがある。

会則の更改—昭和24年の学制革新にともなって、医科大学図書館協議会から、日本医学図書館協議会と改称さ

れ、昭和26年10月熊本総会において改正された会則(7条)を、更に新規に改更することになり、昭和28年10月26日信州総会の決議に基づいて東大、慶応、横浜が制定委員会となった。そこで7条の旧会則を根本として、社団法人定款の様式にならない原案をつくった。

これを内田力三教授(後の東大社研所長)に校閲して頂いたところ、全文にわたって小気味よいほどになおされた。更に法学部の兼一教授(後に公労会長となり労使紛争の解決につとめられた)にみて頂いたが、規則なんかどこんなに立派でも、運営がよくなければ、どうしようもないといわれたが特によくみて頂いた。

12月7日立案となり、同15日更に審議、29年1月6日同委員会で逐条審議された。昭和29年2月20日東大に東北、新潟、慶応、慈恵、横浜、三重、名大、阪大の9大学、それに吉岡、慶応の奨学生が参集し、沢本図書館学科主任補の通訳でミス・スミス教授から米国の相互貸借の実情を聞き、秋の医歯大総会の議決を予定して第2次改訂案を検討した。同5月27日、全国図書館大会に因んで、斉藤、塩野、吉岡、小野寺、丹野、中山、関口、佐野、緒方、中里、駒井、黒川、福地、鎌倉、城野、赤星の各氏10名が好仁会でライスカレーを食べながら、評議員は館長、理事には、実務者若干名、幹事は職員、関西と九州は1区か2区か、協議会か協会か、中央事務局の設置等、公開討論のかたちで懇談をした。

この会則議案は、昭和29年10月医歯大の総会で九大の間田先生の字句修正があったぐらいで、おだやかに無事通過して『医学図書館』に掲載されたのである。

中央事務局一年表には、昭和21年からあったことになっているが、これ(会則改更)までは、病院図書室内日本医学図書館協議会として実際はとにかくとして会則をつくったところ、赤星さん等の主唱によって、初めて中央事務局の印判をつくってからの名称で、会則と共に総会で議決されたのである。

戦前にも同名できまりもあったが、廻り持ちでその年の総会当番館が、一切の事務を行っていたようである。

白鷗漁史『医学図書館』に責任者はといわれ、昭和30年から入れた名で、学生の頃の鷗外漁史をまねたものである。図書館協会の功労賞も多分(略歴提出せず)図書館雑誌に多くこの名で執筆したのがわかったのである。か、医学部史料委員会で史料の太田教授から、学生のころ読んで知っているといわれたこともある。

和歌森太郎教授は、これも多分京都の雑誌を読んだからだろう、何人かわからず修験道史に書かれたようであ

る。古俳書の稿本を図書館に置き忘れ、この名があったために、数年後山田女史から届けられる等、思い出の多い名である。

現行医学雑誌所在目録一刊行を計画すると、雑誌総合目録編刊行の際だったから双手をあげて賛成する人々ばかりではなかった。インデックス・メディクスを基準にでもするならともかく、正確なものができる筈がないと真向からの反対にあい、初めから完全なものなんかあるものかと、ある総会の頃単独でガムシヤラに和洋合冊を始め、1、2回出したところ、みっともないからよした方がよいと非難を浴びながら、更に和洋別々2冊にして出した。

東大総会の前頃、大学院生だった南条先生にゆきとどいた欧文誌の校正を依頼して、ようやく刊行することができたものであった。

これは将来、雑誌総合目録の補充にもなるとの企画だったから、現在も出ているとすれば、喜ばしいことである。

蛇紋のカットー昭和33年名市総会の頃、議題が多くなったので、議題提出の反省または参考にも『協議題総目録』をつくった時、小学館につながる親戚の製版所の厚意で、拙画のカットをつくって頂いた。

富士山に、医学のシンボルである死者を甦らす医学の神といわれるアスクレピオス(Asklepios)の杖のかわりに Library の L に蛇を巻きつけ、団結の意味で江戸時代の壁にある長方形の窓の二重枠で、ガッチリ組み合わせた形を現わし、上下に協会名をあしらったものであった。

これを表紙のカットにしたものであったが、最近これを見受けられたのでなつかしく思われた。

14. 一番困った思い出

新憲法の草案起草に参画し、これの専任国務相となり、GHQと折衝しながら、3千余回の国会答弁をして、天皇象徴論では左右両派から、はさみうちの追及にも数々の名答ぶりをうたわれ、あこがれの大臣の名もでたが、新憲法生みの親ともいわれた金森徳次郎先生は、昭和23年国立国会図書館長となり、「真理はわれわれを自由にする」を国会図書館法にうたい、デイリヴァリーの題額にも残された。

昭和32年11月6日、群大の日本医学図書館協会創立30年記念には、「図書館事業は、地の底から泉が湧いてくるうちに、風光絶佳な景観が生まれるようなものだ、

ゆるみなく前進して医学界に偉大な業績をもって発展されたい」との言葉をいただいた。日本図書館協会々長として頂いたこの大切な祝辞を、総会の前日、群大図書館に持参したが、その肝心な原稿がない。上野から乗った電車の網棚に、置忘れたのに気づいた時の驚きは、何ものにもたとえようがない。もう一度書いて頂くなどとはとても考えられない。昨日じかに先生から頂いて、訂正もあった原稿、読み難いと思って書き写したような気もする、その写しがあるかも知れない。あってくれーありが

えすればと、かたく心に念ずるよりほかなかった。東京にもどる車中の心痛は全くやりきれない。うちに帰って本の間から探しあてた時は、本当にこおどりして喜んだ。誰にも判ってもらえない、このひとりぼっちの大事件は、群大の梅枝君にだけ話したかしら、これほど困ったことはまたとない思いであった。

(祝辞の全文は、「医学図書館」27号P264)

(昭和52年6月20日受付)

＜表紙紹介＞

獨協医科大学図書館

昭和48年4月、獨協医科大学の開校と同時に、当館は機構上独立した学内一部局として正式に発足した。発足後の約2年間は、授業用の教室に仮住いをし、館員、利用者とも、狭いスペースによる多くの不便を忍んでいたが、昭和50年2月に待望の図書館専用の独立した建物が完成した。(表紙)

この建物は鉄筋2階建、延床面積2,631㎡、図書収容能力10万冊、座席数217、冷暖房完備で、完全開架を採用している。設計するに当り最も留意した点は、将来予想される、①蔵書の増大、②図書館サービスの拡大と質的变化に、容易に対応しうるものにするのであった。このために、①に対しては3階への増築を前提とする基礎工事を施し、同時に、利用度の低下した資料の保管には集密書架を採用した。②については、電算機器設置の可能性を予想して情報管理室(54㎡)を設けるとともに、館内のスペースの利用に融通性をもたせるために、固定壁による間仕切りは最少限におさえた。

利用者向けの特別な施設としては、4人及び8人収容のグループ用学習室を各1室、教員・研究者のための個人用閲覧室8室、18～25人収容の会議室兼ゼミナール室がある。

新設医大共通の問題である蔵書の充実については

学内外の理解と協力をえて着実に進展しており、本年3月31日現在で蔵書数は71,711冊、現行雑誌の受入数1,761種に達した。当館における蔵書整備上特記すべきことは、ドイツ学術振興会、Springer社、製薬会社など、ドイツの各界から5,000冊以上の医学書が送られてきたことである。これらの寄贈図書は、獨協学園の前身である明治14年創立の獨逸学協会以来の、獨協とドイツの密接な関係を象徴的に示している。

館員数も発足以来順調に増え、現在は館長を除いて14名となり、一応安定したといえる。

サービス面では、貸出、文献複写、相互貸借等、医学図書館の伝統的な活動に加えて、昨年から文献探索サービスと全学で受入した図書案内の季刊発行を行っている。目下は、他の医学図書館でもみられる、個々の教員・研究者を対象とする、雑誌目次速報及びIndex Medicusを用いた継続的な文献情報の提供の2点を検討中である。

以上の通り、当館は開設後4年有余の歳月を経て漸く図書館としての形態を整えることができた。これからの課題は、いかにしてより良い機能をこれに付加していくかである。協会加盟館各位の御指導と御援助をお願い申し上げる次第である。